

—大雪山のアイヌ語地名⑧—

前回は、伝説ではあるが、クシロアイヌの大軍が、近クシロアイヌのイコロ(宝物を奪い取ろうと、又タクカムウシユベ(註―大雪山)を越えて、石狩川を下ろうとしたが、そこで一衣纏わぬ裸女の歌声と姿に惑わされ、千切の滝に落ち込んで、皆溺れ死んでしまったという。その裸女はカムイで、姿を変えて上川アイヌ達を守ってくれたという。

絶するものがある。しかし、松浦武四郎の『近世蝦夷人物誌』(安政七年刊)を見ると、旭川市域に在住したアイヌの人達の広域行動の一端が伺われる物語がある。その中の二編を紹介する。

①「奇童イキツカ」―元来、此山中に生育ちて、山岳を駆廻り、此辺より南はトカチ、サル、ユウフツ、東はユウヘツ、トコロ、テセウ辺え常に山猟し――

伝説とはいえず、道路も整備されていないアイヌ時代に、クシロ(釧路)から、近文(旭川)まで、往来は可能だ

断章 旭川のアイヌ語 地名研究

174

高橋 基

②「窮夫ヲテコマ」―岩内場所なる山道の笹小屋よりシリヘツの岳の方え入り、東はウス、アブタの辺りまでの山々を住家となし、冬より春は熊鹿狐貂を喰とし、夏秋はシリヘツ川の鱒鮭に生命を送り居りたり――

右の二人は、好んで山猟



新釧路川を下る

に入ったのではなく、上川から強制的に石狩浜へ連行され、石狩浜で過酷な強制労働をさせられるのを拒否しての行動であった。上川での生活の全てを捨てて、山中に入り、逃避行の生活を選択したのであった。特にヲテコマは、石狩浜で番人に妻を強奪され、そ

の上、番人に命を狙われる窮状から、右のように岩内方面に逃れ生活をしていたのである。

このように、アイヌ時代は、川を通路として、北海道内を縦横に往来していたのである。

ここで話題を百八十度変えさせていただきます。筆者の所属する「アイヌ語地名研究会」の事務局長の渡辺隆が、「釧路地方の地名を考える会」から講演依頼を受けて、釧路に行くことになりました。筆者も記録係として同行することになりました。

講演日の前日の七月一日(金)に、写真のように、塘路湖から細岡力ヌーボートまで、三時間余のカヌー乗船体験をすることが出来ました。筆者の「北海道三大河川踏査」については、当連載の⑭で紹介したところですが、釧路川のカヌー乗船では、両岸に鹿や丹頂鶴を見たことに加え、川の深さと

流れが一樣である点で、三大河川とは全く別の趣がありました。

なお、山田秀三の『北海道の地名』によると、塘路湖には有名なコタンがあり、「トオロコタン」(Tooro-kotan) 沼の処・集落と呼ばれ、アイヌ時代の貴重な食料であったペカペン(Pekape 菱の実)の名産地であると述べています。

釧路の講演会には、札幌へ釧路の都市間バスを利用しました。帰途、釧路駅前のバス待合所で、「釧路く旭川都市間バス」↓サンライズ釧路・旭川号が運行されていることを知りました。

釧路から旭川への停留所は、次の通りです。①釧路駅前 ②阿寒町 ③阿寒湖 ④津別町 ⑤温根湯 ⑥層雲峡 ⑦上川森のテラス ⑧愛別橋 ⑨旭川駅前。これを見て、伝説のクシロアイヌの近又コタン襲撃があったとすれば、このルートであると確信したのでした。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第一週号に掲載します